古典碑帖の窓②

大盂鼎（だいうてい）

紀元前十世紀頃

木雞室　伊藤　滋

西周時代の初期（紀元前十世紀頃）の「大盂鼎」には、三百近い文字が、その鼎の内側に鋳こまれています。鼎の大きさ、銘文の文字などから、古代青銅器を代表するものであり、篆書の代表的な手本とされています。一行十五字、全体で十九行からなり、前半十行と後半九行に分けられています。

「大盂鼎」の書き方は、縦横の文字の配置、行間、文字と文字の間隔、一字の大きさなどの面で格段の進歩をとげ、整然としてまるで原稿用紙の升目を用いたような布置です。文字の配置に関する美意識を明確に見ることができます。また書写の面から各文字を見ていくと、この当時にあって、「毛筆」が使用されていたのではないかと思われるような文字や点画があります。例えば、左頁に拡大した九文字を見てください。「有」「民」「公」字の右下へ伸びやかに送り出した線は、まさに毛筆の弾力を用いた抑揚によるものではないでしょうか。「四」字の四本の横画も左から右へ軽やかに毛筆を押し出したもので、「天」「王」「土」字の太い塗りつぶした線は左側から、右側からさらに中央の上方から下へ押し出された筆致がすべて寄り合った結果太くなり、「易」字の左側の短い横画は右側から筆を入れ、左斜下に押し出したと想像されます。鋳造された文字、金文から、生の毛筆感は窺い難い面がありますが、丁寧に観察していると所々に、やや原始的であるが、毛筆の筆勢を見ることができます。

大盂鼎

大盂鼎の銘文拓

土⑦

易④

天①

公⑧

四⑤

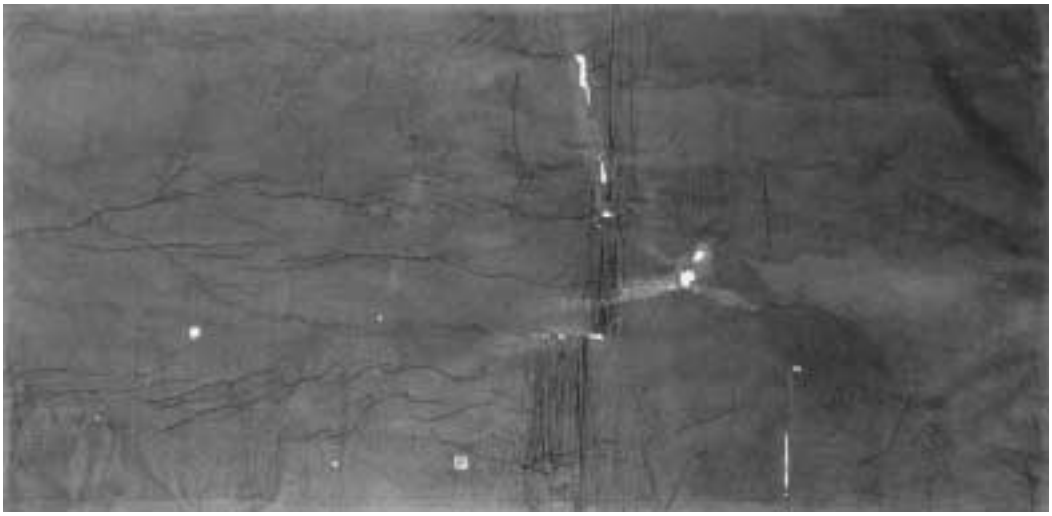
有②

鼎⑨

民⑥

王③

書道芸術院
平成の書（2009）



名久井裕三書

名久井　裕　三

書道芸術院展
参与会員

〝私の前衛書〟

縁あって人に導かれて出会いその人間性に惹かれ仰ぎ師事したのが和井田要先生でした。先生の戦前は絵画指向でした。それで森田子龍編纂の墨美による欧米画壇の抽象表現画家の紹介以前から内外画家の抽象動行を関心をもって見ていた先生でした。

昭和の時流の中で太平洋戦争に参戦し言語に絶する凄惨な臨死体験をして間もなくの終戦には極限体験で真っ白に変わった頭髪と生々しい戦傷以外全くの無一物での帰還でした。以後は唯々心身療養と将来の思案の日々でしたが、ふとした事から戦後の書の革新を創立理念の第一義に掲げ書芸の自由を絶叫して決然として起った吾々は、云々の昭和22年11月の書道芸術院創立趣意書を目にして眠っていた美術指行の心を呼び覚まされ趣意書の理念に共鳴しやがて惟あって院の前衛書部に籍を置いた先生でした。

先生の前衛書制作理念は戦時の命を思う体験からその時代に関与し真摯に生きる命の感動を根底に思索するものでした。

先生はご自身も気付かぬうちに病魔に冒され昭和42年6月に総ての思いを半ばにして幽明を異にされました。56才でした。

平成の時空に遺された先生の理念に自分の生きる命の感動を重ね合わせ表現主義を以て平成の書に関わっているのが私の前衛書です。

書のひろば

理事長　恩地春洋

地域に密着した三宅素峰展

―高い境地と豊かな詩情―

去る四月十四日から十九日まで、岡山市の天神山文化プラザで、三宅素峰展が催された。タイトルは「心に語りかける書〝三宅素峰の世界〟」

文化功労者、高木聖鶴先生始め、地元書道人の圧倒的な支持の中で、全館に展示されて、素峰先生一代の業蹟が紹介され、参観者を魅了した。

「若い頃、香川峰雲、種谷扇舟先生に見出され、書道芸術院に参加したのが三宅素峰先生が中央書壇に登場した最初であった。

戦後、激しい現代書運動の渦中にあって、書の革新のため、視覚的な書、前衛書に関心を持ったのも、戦後作家の特徴である。

やがて、岡山という伝統的に書の盛んな風土もあって、「文学と書」という形をくずさず近代詩文書協会や毎日書道展という全国展の中で、先生は「現代の書」に標的を定め、言葉の詩情と表現技法の探求に尽瘁された。

先生は、温厚な性格ながら、書に対しては妥協を許さず、年と共に厳しさを増していった。晩年は、全ての役職を捨てて、孤高の境地開拓に専念された信念の人である。

その高い境地と、豊かな詩情と風韻は書道界でも高く評価されている。

（同展案内書より　恩地春洋）

会　場　風　景

尚、先生の書は、二冊にわたる作品集に集録されているので、作品を通して、じっくりと対話することができる。「書は人なり」という、会場内放映のビデオに、若き頃の素峰先生が前衛書に取り組んでいる姿があった。戦後を生き抜いてきた人間三宅素峰先生が会場に溢れていた。書の魅力は人間の魅力であると痛切に感じた一日であった。

「三宅素峰作品集」希望のお問い合わせは、〔三宅素峰遺作展実行委員会　委員長　小竹石雲まで〕

闘病と書と

―小島白洲死す―

前列左より　岡田米峰、中川雨亭、伊藤神谷、米田桂谷
後列左より　恩地春洋、小島白洲、川崎梅村、香川峰雲
（「筆友会全国学生書芸展」S.27.2.10 大阪市立美術館）

小島白洲君が逝った。

白洲君は私と同郷同期の同志で絶えず行動を共にした。彼は情熱家で努力家、よいセンスを持っていた。酒豪で酒の逸話が多い芸術家だった。

本格的な書への思いから57歳で学校退職、張り切り過ぎて脳出血で倒れた。以後、治療の傍ら、書との苦闘が続く。二十余年、体力次第に回復、喜寿展と共に句集も出版した。書展は好評、「漲」や「志学」「飛火野」は注目された。然し、二〇〇六年、彼は開会前に第二回目の脳出血に見舞われた。自ら企画の個展を見ることもなく白洲君はコンコンと眠り続けた。

四月八日、霧の中に浮ぶ牡丹の花のような富士をみた。帰阪して彼の死を知った。愕然とした。思えば小学校から七十数年のお付きあいである。共に上阪した岡田米峰君は期待され乍ら30歳で、私の誕生日に逝った。そして白洲君を今失う。九日の通夜、十日の告別式も最後まで見送った。

燃え尽きし花の命をいとほしむ　春洋

漲（平成17年）　180×180㎝

21世紀の書
―私の主張―

漢字(二)

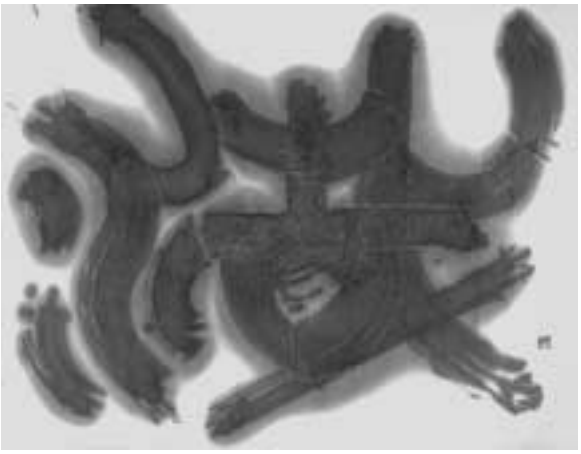
小浜大明

前回述べたように、新しい書を生む為には、古典の臨書は欠かすことのできない大切なものであると考えます。

その学習の後、古人の形に捉われない、新しい書を生み出すということが大切です。しかしそれは並大抵のことではありません。苦悩もあれば、驚きも悲哀もつきまとうことでしょう。

個性ある作品を創作するには、創りつつ鑑賞し、鑑賞しつつ創るということが大切になると考えます。創ることは見ることによって導かれると思います。鑑賞力がなければ、優れた造形は不可能となるでしょう。優れた作品をより多く鑑賞するということは、とても大切なことだと考えます。鑑賞にあたり、一人一人の感じ方が異なるものと思います。また、作者の表現の発想と必ずしも一致しない場合もありうることでしょう。そこに芸術が生れるものと考えます。鑑賞力を養うと共に、各自の発想を表現する為には技法も大切でしょう。

技法の多面的研究が必要とされると考えます。その為には、多くの書体について習熟することが大切です。特に漢字の起源とされる甲骨文字や、金文、篆書、木簡等々の幅広い学習が必要になると考えます。



「水哉」第55回毎日書道展出品

小浜大明書　3.5尺×4.5尺

かな(二)

前田まさ美

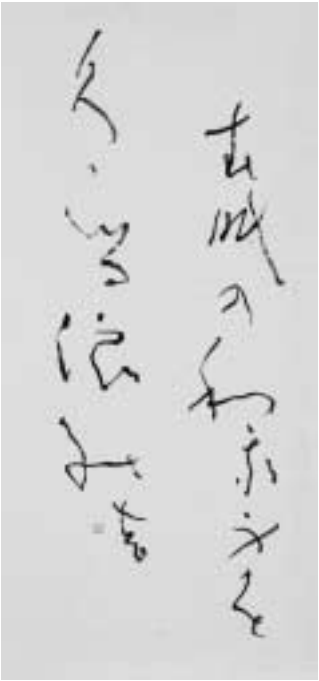
没後一七〇年記念展「良寛さん」が開かれたとき、描かれた良寛に、祖父の面影が重なり、ただ「書きたい」という気持ちになりました。高野切、小色紙、寸松庵色紙と臨書、倣書に挑んでいましたが、こんなことから、良寛の倣書に挑戦することにしました。

右、左に揺れ傾く字形、一字一字が単体でしかも流れのある行、文字のデフォルメ、一本の線も何回かの呼吸で書かれ、変体仮名も私の頭の辞書にないものばかり……。書きたいから書けるものでないことを痛感しました。

良寛が学んだと言われてる、懐素の「自叙帖」道風の「秋荻帖」など、根底にある古典を改めて学ばなくてはと、課題が多く少々焦り気味です。

「春眠のわが身をくぐる浪の音」

山口誓子の句を半切½に書きました。筆は中鋒、兼毫筆、紙は唐紙の素紙です。筆の上部を持ち、からだ全体を動かして、線が単調にならないように、字形の不安定さや行の流れ、余白……等に気をつけながら書きましたが、何かが足らないですね。この何かを勉強していきます。



「春眠のわが身をくぐる浪の音」

前田まさ美書

書話シリーズ 372

「奈良」

藤原小翠
（漢字部・審査会員）

一昨年は奈良県文化会館で毎日書道展第60回記念巡回奈良展が開かれました。その会場から車で15分程西に位置した所に薬師寺・唐招提寺がありますが、私はそのすぐ近くに大阪から移り住んで30年以上になります。

奈良には沢山の社寺・仏閣があり、それぞれで色々な年中行事が執り行われています。普段は見る事の出来ない秘仏が公開されたり、古式ゆかしい歴史に触れる機会も多々あります。

薬師寺でも色々な行事がありますが毎年ほとんど行かせてもらうのは、五穀豊穣を祈る修二会（花会式）で、本尊薬師如来に十種類の色とりどりの造花が供えられるのです。雅楽の奉納や野点等あり、桜の花が咲く季節で観光客も多く来られます。

年末の除夜の鐘つきも厳かで身が引きしまって良いものです。

唐招提寺は観月会が素晴らしいと思います。暗闇の中、門をくぐると正面金堂に安置された千手観音・弥勒如来・薬師如来が明るく照らされて神々しく直近に迫って来るのです。その金堂の頭上にめでる中秋の名月は見事ですが、現在は金堂修復工事の為に残念ながらこの情景は観られません。

薬師寺

〈うちわまきの時の絵〉

棟方志功作

また、5月にはうちわまきが行われ大勢の人達が争ってうちわを取り合います。歴代の有名人が、ハート型のうちわに書かれた立派な字や絵を幾つもの大きな屏風に張られているのは、とても見ごたえがあります。

最寄り駅は近鉄電車西ノ京ですが、駅のホーム中央に「法相宗大本山薬師寺」と書かれた背丈三㍍程の石碑が建っているのです。初唐風の凜とした威厳を感じる楷書体で、以前から私はその碑を見るたび気になっていました。思いきって薬師寺にお伺いに行ったところ、この碑は、20世紀最後の怪僧と異名を持つ薬師寺一二三代管主橋本凝胤の手に依り昭和6年に建てられたそうです。

その弟子がマスコミでも有名だった高田好胤で、その後、管主となり中心となって写経勧進を広め荒れていた白鳳伽藍を次々と再建、今では世界遺産になっています。

お写経は、私も縁あって百十巻迄させて戴き少しは再建に貢献出来たかと思っております。

写経場は伽藍とは離れた静かな所にあって、落着いてゆっくりお写経が出来、勿論、自分の字で良いのですが田中塊堂先生が書かれた般若心経を書き写す形式になっています。

唐招提寺でも写経はありますが決められた写経会の時だけです。その時は普段入ることの出来ない御影堂の鑑真和上宝前でさせて頂け、東山魁夷画伯の襖絵も垣間見る事が出来ます。

見て書く般若心経は、唐招提寺に伝わる古い物とお聞きしました。

どちらのお写経をさせて頂いても終えた後は、穏かな気持で心安らぎます。

また、初夏にはどちらのお寺も沢山の立派な蓮が栽培されていて次々と美しく咲き見事です。我家にも唐招提寺から分けて頂いた四種類の蓮が同時期に咲いて、毎年楽しませてくれます。

こんな恵まれた古代建築や古美術に囲まれた環境でのんびりした生活を楽しんでいます。

これからはこの奈良を違った目で見直して作品に繋げて行けるよう頑張ってまいりたいと思います。

書話シリーズ 373

「急がず休まず 一歩一歩前進」

上田和栄
（前衛書部・審査会員）

私の師、浜谷芳仙先生との出会いはもう35年も前になろうか。娘が保育園年中組の頃で、私の姪（宮﨑久美子）が芳仙塾で頑張っている様子を見て、私の娘（今井雅子）にもと思って入門し、片道15㎞の道を休まずに通塾させました。今、娘も姪も前衛書部の審査会員候補になっております。

娘の送迎役だった私が、娘だけでなく、自分も習いたいと思ったのは、それから10年も経ってからであろうか。大きな筆で字を書くイメージではなく小さな半紙に書ければよいという軽い気持ちで入会させてもらいました。

ある時、先生の勧めで院展に出品することになりました。勿論、前衛書とは何か、チンプンカンプンわからないのにただ書いて出品しました。

何時もの定例研修会には必らず参加していましたが、まわりの人の作品に気をとられ悪戦苦闘の研修会でした。

入会して3年目の第37回院展で準特選に入賞し、びっくりしました。表彰式に出席して多くの人達の晴やかな顔を見て、初めて頑張らなきゃと発奮しました。

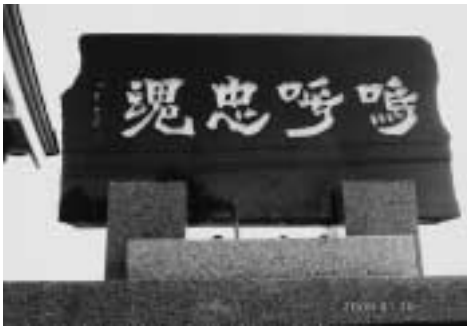
若い人達のように、無鑑査や審査会員候補へと早く昇格できなかったけれど、先生の指導を受けているうちに、制作の基本である「簡潔な造形」とか「表情豊かな書線」などの理論と技法が少しづつわかりかけてきました。

第59回院展作品

第57回と第59回院展で栄ある白雪紅梅賞の特別賞を2回もいただき、喜びと驚きで跳び上がりました。何か盆と正月が同時にきたような嬉しさで、その時の感情は永遠に忘れない。

浜谷先生の書への情熱と指導力に頭の下がる思いがいたします。

先生の日頃の言葉は、古典で学べである。平成13年、院の「ふるさとの金石碑」の研究論文募集に応募しようと思って、近くのお寺やお宮を歩き廻りました。先人の碑に込められた言葉や、筆跡に学ぶことが多くありました。そのひとつに故深松海月先生の「嗚呼忠魂」の碑があり、六朝の造像記の書風が強くでており、深く彫られた碑石に見とれていました。先生が「古典を通して骨法練習を」と叫ばれたことが懐しく思われました。



石　碑

一昨年富山県民の活性化を図る為に考案された企画展。書と絵画と写真とを平面芸術とし、工芸・彫刻を立体芸術とみて、平面と立体の二部門性による公募となり、新時代を開く作家の登龍門として「越中アートフェスタ」が開催されたので、それに応募しようと先生に相談してみました。全国的にも例のない企画展で、県民の関心も高く力だめしにと出品してみたところ入賞し、新聞にも大きく取り上げられました。浜谷先生も審査員を務められ苦労なさったようでした。

私の人生はのろのろ歩きですが、今やっと皆さんの仲間入りが出来たようです。これからの峠道・茨の道をどう切り抜けるか不安でいっぱいですが、師や先輩の言葉を励みに、一歩一歩前向きに努力したいと思います。

今後は、師へのご恩返しになるように、書径舎や墨仙会の皆さんとの和を保ち、会の発展にも尽力したいと思います。また書を通して人間としての生き方も学んでいきたい。

何卒よろしくお願いします。

第62回書道芸術院展〈続〉

実行委員長
辻元大雲

60回の節目を越えて早や2年目となった院展は例年通り6月中旬の運営委員会から実質的にスタートした。本年は毎日書道展が60回の記念展を迎え、各種の記念事業をこなしながらの準備となり、恩地理事長をはじめ慌ただしい中での運営となった。特に毎日展功労者表彰実行委員長を恩地理事長、副委員長を辻元担当、春敬コレクション展実行副委員長を辻元、日中女流書交流展担当理事を恩地理事長、さらにブラジル展、台北展と息つく暇ない状況であった。10月には秋季展とあわせ「恩地春洋個展」、本年2月には「辻元大雲個展」まで盛りたくさんの行事の中での62回展運営であった。

基本的には61回展を踏襲し、細部では部署ごとに工夫、改善を行った。以下、各部の実施状況を報告する。

外部評論家の眼

今回は麻生泰久、青木利夫両先生にお願いし、2月6日展覧会初日の記者会見の折にお願いした。ご高評は別掲の通り。印刷して参観者に配布、鑑賞の資料としていただく。会場への掲示も行った。

（担当　恩地春洋・辻元大雲）

○総務部（12月3日～H21　2月12日）

本年より総務部と搬出入部を統合し総務部として作品搬入なども担当していただくこととした。作業内容と時間帯が重なることが多いため、事務の簡素化とともに実施した。昨年暮れの無鑑査・一般公募の未表装（マクリ）での搬入、鑑別審査から、年明けの役員書類搬入、作品搬入受付、整理、さらに陳列時の動員接待、会期中の受付、表彰式、祝賀会の受付補助も担当していただく。

最終日2月11日は帝国ホテル手伝いを除き、祝賀会欠席で展覧会場の撤回、搬出準備にあたっていただく。誠に申し訳ないことであるが、縁の下の力持ちとしての働きに深く感謝申し上げたい。

（部　長　東福青篁）
（副部長　江本興舟・福島李舟）

○審査部（12月12日～H21　1月31日）

無鑑査・一般公募の未表装による鑑別審査はほぼ定着し、出品票のバーコード化による審査事務の能率化、漢字部・現代詩文書部でのデータを活用しての審査遂行も軌道に乗ってきた。まだ充分とはいかないが今後さらに改善されると便利かつ正確に行えると思う。

一般公募担当当番審査員35名、無鑑査も同じ、委員など合わせて総勢160名余が、1～2日かけて行った。漢字・現詩の2部門は2日目に事務処理を行った。入賞率は昨年と同じ、一般公募55％、無鑑査40％、上位入賞は質を重視してレベルの高さを競う。

審査会員候補以上の特別賞選考は1月30日に審候の大賞選考、31日に審査会員の峰雲賞選考を行う。各部ごとの候補選出の審候10％、審査会員20％は昨年と同じであるが、今回は各会派、地域のバランスを考慮し、院の組織力の育成に役立つような配慮も行う。候補選出にあたり各会派に広く目を通し、バランスよく選出をとの恩地春洋審査長の意を体して選考にあたった。さらに各部割り当て数の半数を最終候補として選抜した上で全体審査、投票を行った。最終候補にはやはり質の高い、主張をもった作品が残り、結果は既報の通りである。審候の大賞候補作品は名札に青シール表示、審査会員の峰雲賞候補作品は赤シール表示を昨年同様行う。

（部　長　小竹石雲）
（副部長　太田蓮紅・弓削光峰）

○陳列部（2月5日～2月11日）

都美5,5室使用は昨年と同じスペースで、B1から2階まで三層構造のため綿密な陳列計画を立てて行う。本年特筆すべきことは、例年部門別陳列を行ってきた無鑑査・一般公募も審査会員候補以上と同じく混合陳列としたことである。上位入賞作は一か所に集中の陳列、他は50音順を原則とし、篆刻刻字のみガラスケースなどで集約した陳列とした。次回は篆刻刻字も他部との混合で50音順としさらに参観者の便宜を図る予定である。

5日の陳列は委員と動員の方、川端商会の担当でスムースに完了。11日撤回は帝国ホテル表彰式・祝賀会と重なったため主要役員、正副総務部長、川端商会で担当して無事終了した。

（部　長　田村鄭雲）
（副部長　尾形澄神・塚越紅苑）

〈記者会見〉

○記者会見（2月6日　都美）

会期初日10時より恒例となった記者会見は、毎日新聞社ほか評論家、報道関係の方々のご来場をいただき開催。恩地理事長から62回展の基本構想、取り組みの現状、今後に目指すものなどを訴え、辻元大雲より配布資料をもとにした現況報告を行う。参加者は15名余でほぼご案内した各社の方のご出席をいただいた。

（担当　恩地春洋・辻元大雲）

○作品研究会

本年は表彰式前日が平日の火曜であったため講堂の借用ができ、平日ながら会場は満席立ち見の盛況であった。

恩地理事長より基本的な解説の後、院主要幹部、大作の解説を行い、その後各部ごとに特別賞選考委員（峰雲賞）の先生方に担当していただく。漢字（大野祥雲）かな（黒川江偉子）現代詩（辻元大雲）篆刻刻字（宮澤梅径）前衛（浜谷芳仙）。

時間の関係で取り上げた作品は限られたが、無鑑査作品あたりまでもう少し幅を広げてもよいと思われた。

（担当　恩地春洋・辻元大雲）

〈理事長あいさつ〉

〈作品研究会〉

○祝賀会部（2月11日　帝国ホテル）

祝賀会部も本年より表彰部を統合して一本化した。帝国ホテル会場の流れから統合したほうが連携を取りやすく無駄も無くなる観点からである。

表彰式は麻生峰扇副部長をチーフとして、帝国ホテル富士の間を会場に挙行。独立した会場での式典はスペースのゆとり、時間的な流れなど非常にスムースで、かつ立派な素晴らしいものであった。特に本年より無鑑査は秀作まで、一般公募は佳作まで個別授与として広くご案内したため、列席者は例年より約百名余増加した。授与方式も毎日書道会寺田健一専務理事を御来賓としておいでいただいたほか、今回は院財団理事の方々全員にご担当いただき、さらに華やかなものとなった。係の適切な誘導もあって受賞者増にも関わらずスムースで、10時の開式から閉式は11時20分で、後半の祝賀会への移行に余裕が持てた。

祝賀会は外部より評論家・報道関係者のみお招きして約30名、会員は550名余の参加で、12時30分より石田春窓部長、崎井恵風副部長の指揮で進行。帝国ホテル孔雀東西の間を使用して全員

〈峰雲賞授与〉

〈大賞授与〉

〈白雪紅梅賞受賞者〉

〈謝　辞〉佐々木浩子さん

着席のもと行われた。辻元大雲実行委員長開会のあいさつ、主催者あいさつ恩地春洋理事長、来賓祝辞を毎日新聞社取締役東京本社事業本部長常田照雄様、評論家田宮文平様よりいただき、乾杯のご発声は毎日書道会専務理事寺田健一様の力強いお言葉で開宴した。

恒例の入賞者紹介は地方文化功労者をあわせ62回展の主要入賞者を紹介。浜谷芳仙実行副委員長の閉会の言葉で宴を閉じた。

（部　長　石田春窓）
（副部長　﨑井恵風・祝賀会担当）
（副部長　麻生峰扇・表彰式担当）

○会計部

院展の台所を預かる会計部は、少数ながら全ての部署との連携で、陰ながらの努力をされている。綿密な計算のもと、誤りなく処理され感謝申し上げたい。

（部　長　榊原秀蘭）
（副部長　白石和楓）

〈来賓祝辞〉評論家 田宮文平様

〈乾杯〉
毎日書道会専務理事　寺田健一様

〈峰雲賞受賞者〉
坂本素雪氏あいさつ

○運営事務局

芸展運営の全般にかかわり事務処理を担当。膨大な事務作業であるがコンピューターを駆使して、またリンクス社とのデータのやり取りを綿密にして行う。出品個票の出力、搬入統計の集計、審査結果の通知、陳列計画、作品配置50音順データ、表彰式の座席配置、祝賀会座席配置など総務・審査・陳列、祝賀会、会計などあらゆる部門の事務処理にかかわった。陰の努力に感謝申し上げたい。

（事務局長　千葉蒼玄）
（事務局次長　尾形澄神）

〈祝賀会会場風景〉

評論家の眼

麻生泰久の眼

「わかれ雪」　下谷洋子

・大字かなという表現の意識下に作者の書的理念を窺う。空間把握の確かさと余白に働きかける書線の共鳴がこの作品を支えている。高度な技術の成果。

「母の手」　小竹石雲

・現代詩文書表現に木簡の技法を繰り入れて、ややもすると抒情性に流れるという弱点をそれによって見事に補強させた刮目すべき作調である。

「凝視」　真下京子

・「凝視」とうタイトルのイメージを黒と白とによって印象的に表現したが、それは現今の混沌とした社会風刺を思わしむ。感性の鋭さに感動。

「形直影端」　最首翠風

・表現至難な方形の紙面を苦もなく制した手腕は流石。筆勢、字形、潤渇の効果が作品に変化を齎し、字座の位置の占めたる位置の確かさに書の本道を見る。

「シリウス」　千葉蒼玄

・明快なコンポジションと白黒の対照的効果。嘗て、赤と黒のテーマの作調に強烈な印象を残したが、低迷する院内の前衛部において気を吐く活動ぶりは賞賛に値する。

「初空に鳥の旋回」　尾形澄神

・鮮やかな筆致と墨妙が相俟って清韻を呼ぶ作である。抒情の世界も堅実なる技法と衒いのない雅品が備わってこそのものである。

評論家の眼

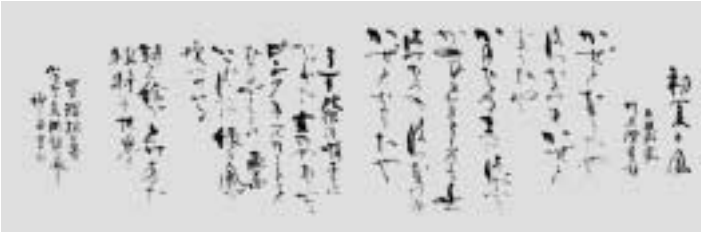
青木利夫の眼

「高嶺のみゆき」　朝倉春江

・「高嶺のみゆき」の連綿かなはどちらかと言えば強い線だが、中央で「行」を盛りあげる全体構成に見ばえがある。

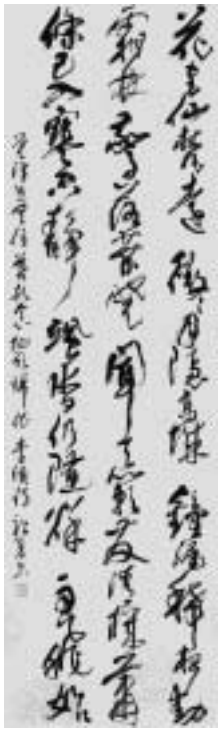
「聖」　荒井柊雲

・「聖」太細の線の対比が美しい。文字性はないだろうが、将に向き合うと、大胆な「にじみ」の効果に引き込まれる。



「初夏の風」　伊勢紗由

・「初夏の風」の詩文書が細線で端正にしっかり書かれている。技巧に走らず、好感を抱かせる落ち着いた作品である。



「宿瑩公禅房聞梵」　木村船翠

・「宿瑩公禅房聞梵」多字数漢字を伸びやかな線質の行草体でまとめ、最後まで乱れない。渇筆を用いず、文字の間のとり方にリズム感がある。

「豊楽無事歓」　赤羽蘭径

・「豊楽無事・・」は、まず古文字の魅力に目がいくが、素地の削りにまで意を尽くしている。しかし「自書自刻」の元である文字研鑽を感じる。

「宗左近の詩」　田村鄭雲

・宗左近詩「瀧昇り一匹の鯉星となり」の「瀧」の潤筆、「鯉」の渇筆の対比の妙が鮮やか。勢いのある大字表現も魅力である。

古典鑑賞

288

漢字研究部

久隔帖（最澄）②

〈解説〉書における師承は明らかでないが、延暦23年（804年）に入唐し、帰朝に当って王羲之の十七帖、王献之、欧陽詢、褚遂良などの筆跡や法帖類を持ち帰った。その書風は、空海の変幻自在に比べて、清澄で品格が高く、真跡として現存する久隔帖である。

（編集部）

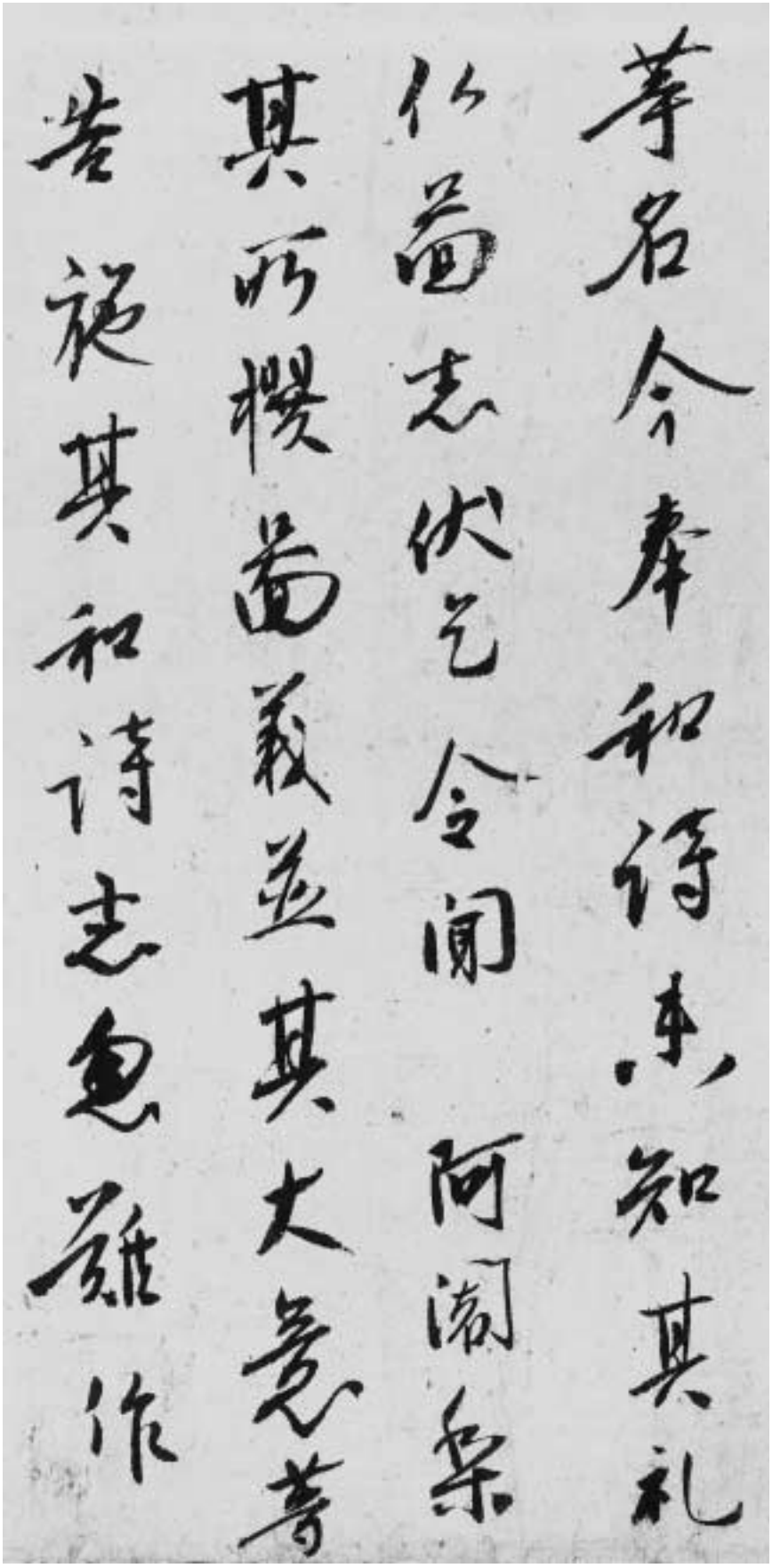
用紙　半紙普通判

＝注＝

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。

（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）



等名。今、奉二和詩一、未レ知二其礼／仏図者。伏乞令レ聞二阿闍梨。／其所レ撰図義並其大意等／告施。其和詩者忽難レ作、

古筆鑑賞

⑥② かな研究部

筋切（伝・藤原佐理）②

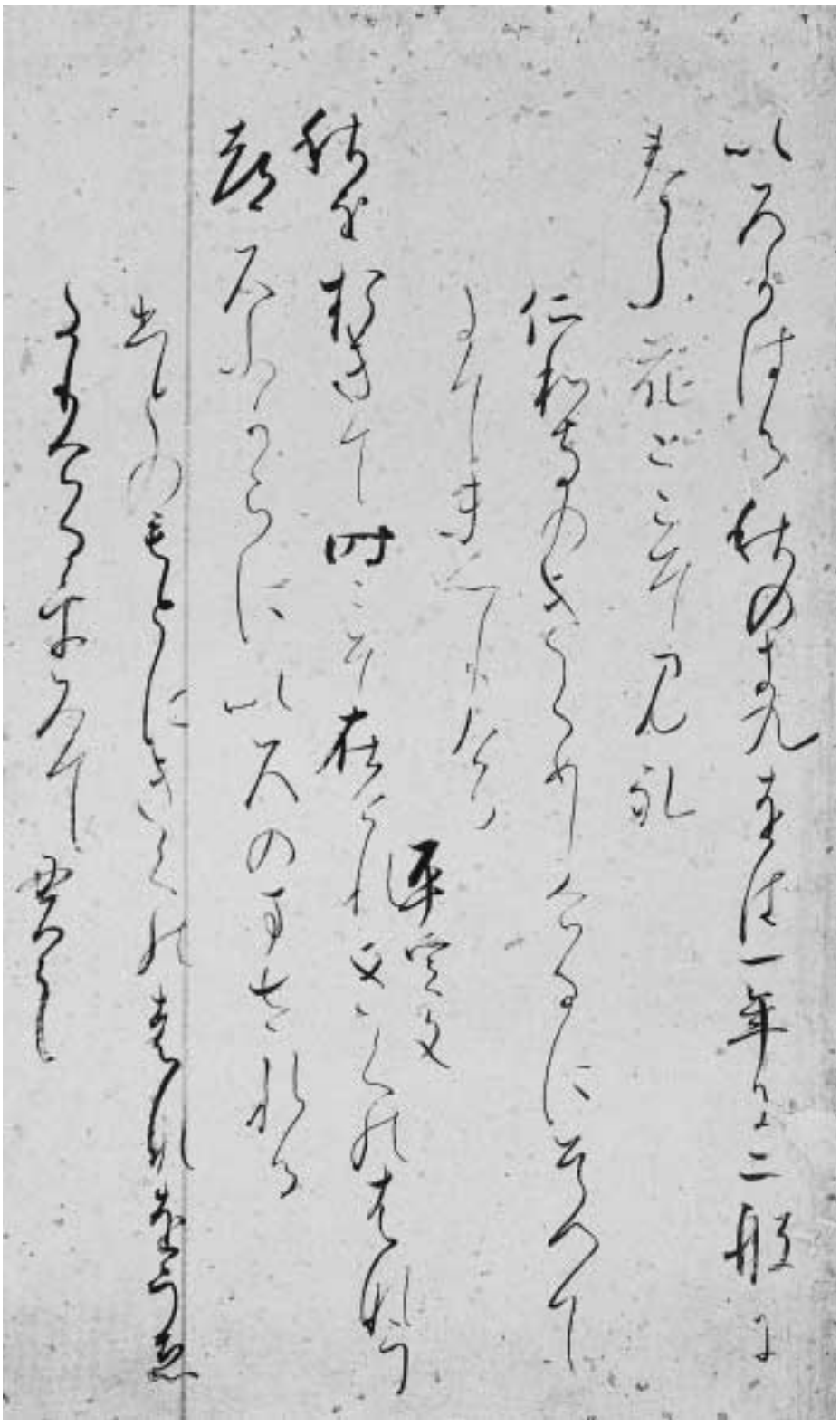
〈よみ〉
いろかはる秋のきくをば一年に二般に
ほふ花とこそ見れ
仁和寺のきくめしけるに、そへて
たてまつりける

秋をおきて時こそ在けれきくのはな
つろふからにいろのまされる
ひとのもとにきくのはなをうゑ
たりけるをみて　貫之

平定文

〈解説〉料紙は、鳥の子の白紙、あるいは浸染による数色の色紙で、表面には飛雲文様、または羅紋を漉きこみ、全体に金銀の砂子をあらく撒き、銀泥で蝶・鳥・草花の下絵を所々に配する。特に注目されるのは、天に三本、中に一本、地に一本の横線を引いた歌合の清書用のための料紙を転用していることで、これを縦に使って冊子に整えたため、縦に筋が入っている。このため、筋切とよばれる。（編集部）

（掲載写真縮小90％）



※右記の掲載歌一首以上を書く（全臨も可）　用紙・半紙普通判（料紙可）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

漢字規定　初段以上【六月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

大野祥雲選書

春晩取花去　よみ（春晩花を取りて去る）

書体＝自由

習い方解説（二）

大野祥雲

春晩取花去
（春晩花を取りて去る）

「春」横画の方向、長さに注意し、左右の払いは伸びやかに。「日」はバランスよく収める。

「晩」肉太の「日」を下方に書き、軽快に筆を運んで旁に移る。これを受け、緩急自在、意のままに運筆。気付くと疎密もできていた。

「取」「晩」の構成とは逆に偏は縦長で大きく、旁は簡潔にして周囲の白を生かす。

「花」各所に白をとって明るく。そのため点画が離れて見えるが、空間での連続が大切。

「去」画数は少ないが、直線を生かし、紙に食い入る線に。最後は全体を引き締めるにふさわしい点を打つ。

漢字規定　秀級以下　【六月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

種谷萬城選書

知過必改　よみ（過ちを知っては必ず改め）

書体＝楷書

習い方解説（二）

種谷萬城

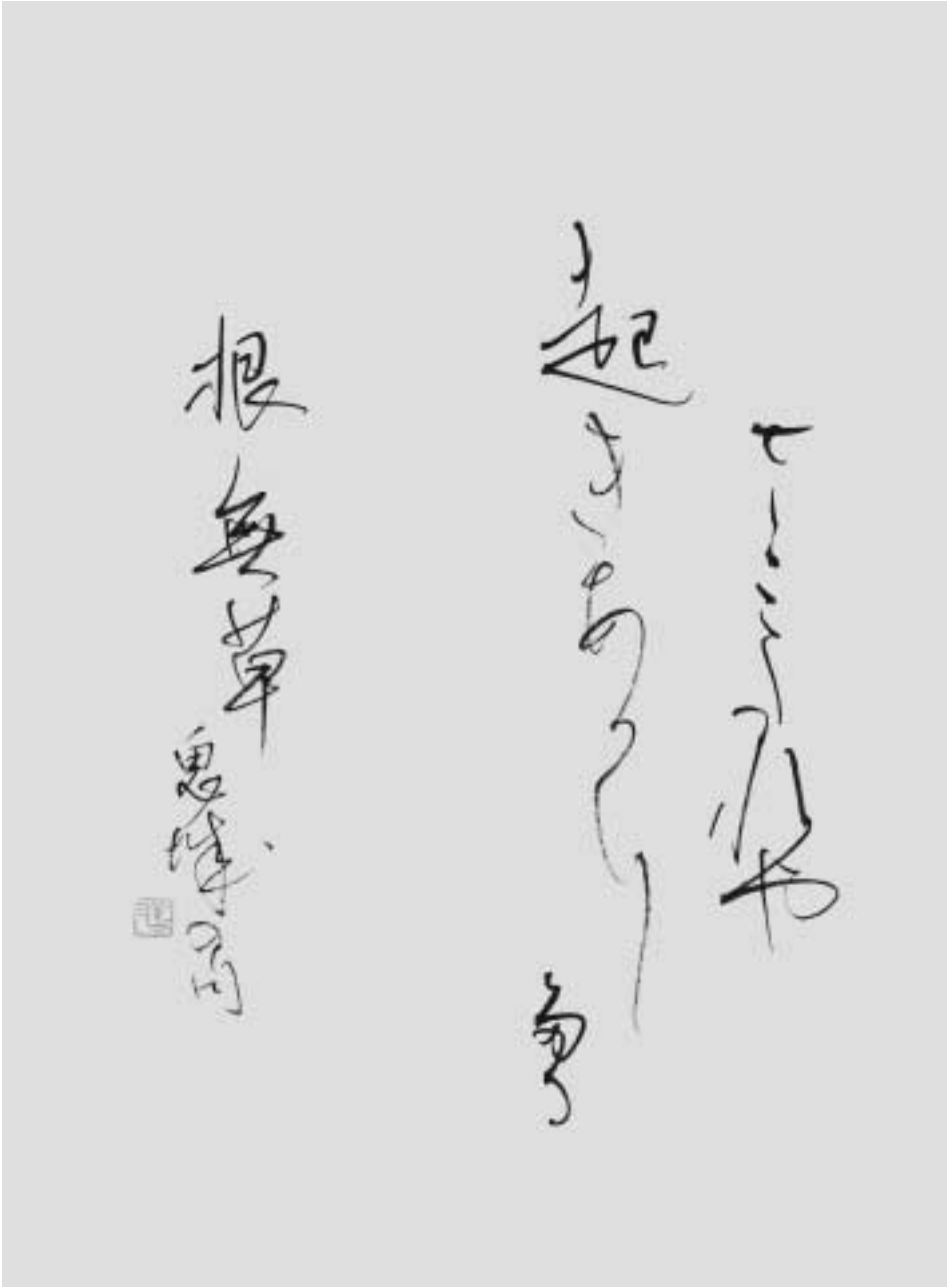
知過必改
（過ちを知っては必ず改め）

「知過必改、得能莫忘（過ちに気付いたら必ず改め、大切なことを学んだら、忘れるな。）」は千字文の中の言葉です。

今月は、北魏の龍門造像記の書風で倣書しました。洛陽の郊外にある龍門石窟は、北魏時代から開鑿された仏教遺跡です。洞窟一三五二、仏像九七三〇〇、その仏像に造像の由来等を刻し添えた造像記は三六〇〇を数えます。牛橛造像記、始平公造像記、賀蘭汗造像記など、北魏時代の造像記は、点画が角張り、刀意があり、迫力溢れ、豪放な魅力に富んだ書です。硬い毛の筆で、濃墨を用い、起筆を強く打ち込み、力強い送筆をして、気迫に溢れた書を書きましょう。適切な執筆法、腕法、姿勢と、何よりも気力の充実が大切です。

かな規定　初段以上【六月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

下谷洋子選書



よみ方　さみ(三)だ(多)れや起きあが(可)りた(多)る根無草　鬼城の句

創作

習い方解説 (二)

下谷洋子

五月雨(さみだれ)や起き上(あが)りたる根無草(ねなしぐさ)
（村上鬼城）

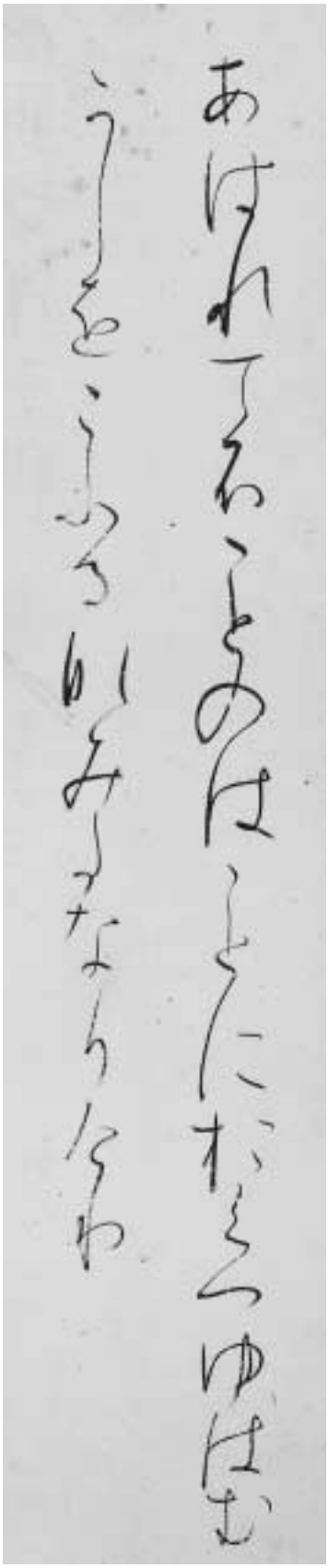
濁流の中で、根無草が必死で起き上がるという勢いのある句です。

俳句は特に、句意を尊重しますが、その際よく迷うのですが、漢字の表現の仕方です。ここでは行書を用いましたが、これも約束事があるわけではないので、辞典を活用し工夫して創作してください。個人的には、文字数が少ないため行書の方が全体が引き締まるように思いますが、草書になるとまた趣が変わりまろやかになるでしょう。ただ〝起き〟の起は、変体かなとしても使いますので、やや大きめにするとか、漢字として読ませる工夫が必要です。

このように活力のある句は、紙面の表情が小味にならないようにしたいですね。

かな規定　秀級以下　【六月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。



高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　あはれてふ(不)ことのはごとにお(於)く(久)つゆはむ
か(可)しをこふるな(那)みだ(多)なりけ(介)り(利)

かな条幅規定　【六月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

木村東舟選書

よみ方　五月雨(さみだれ)のく(久)も間(ま)の(能)月(つき)のは(者)れ(連)ゆ(遊)く(久)を(越)
し(新)ば(者)し(志)ま(万)ち(遅)け(介)る(流)時鳥(ほとときす)か(可)な(奈)

創作

出品券貼付位置

習い方解説 (二)

木村東舟

さみだれの雲間(くもま)の月(つき)の晴(は)れゆくを
しばし待(ま)ちけるほととぎすかな
（新古今和歌集）

五月雨を降らせた雲が晴れて、月が照るのを待っている時鳥の姿を歌っています。今回は横書きですが、行数を八行にし、一行の文字数を三～四文字で納まるように書いてみました。特に中央部を盛り上げたく思い、字形を少し大きめにし筆圧も加えました。字粒を大きくした行と行の間は広めに空けて書くと、すっきり見えます。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【六月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

村野大仙選書

空翠山遙蔵古寺　平蕪路遠没春流
（空翠山遙かに古寺を蔵し　平蕪路遠く春流を没す）

書体＝自由

習い方解説（二）

村野大仙

6回目まで全部14文字の課題にしました。その方が習いやすいと思いますので。文字は行書主体で分かりやすい草体を混ぜたものにしました。確りと文字を確かめて自信を持って運筆する様心掛けてください。そして、まずは文字の中心線をそろえてすっきり見える様に書き上げる努力をしてください。

漢字条幅規定　秀級以下【六月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

半田藤扇選書

翰墨伴清間
（翰墨清間に伴う）

書体＝自由

習い方解説（二）

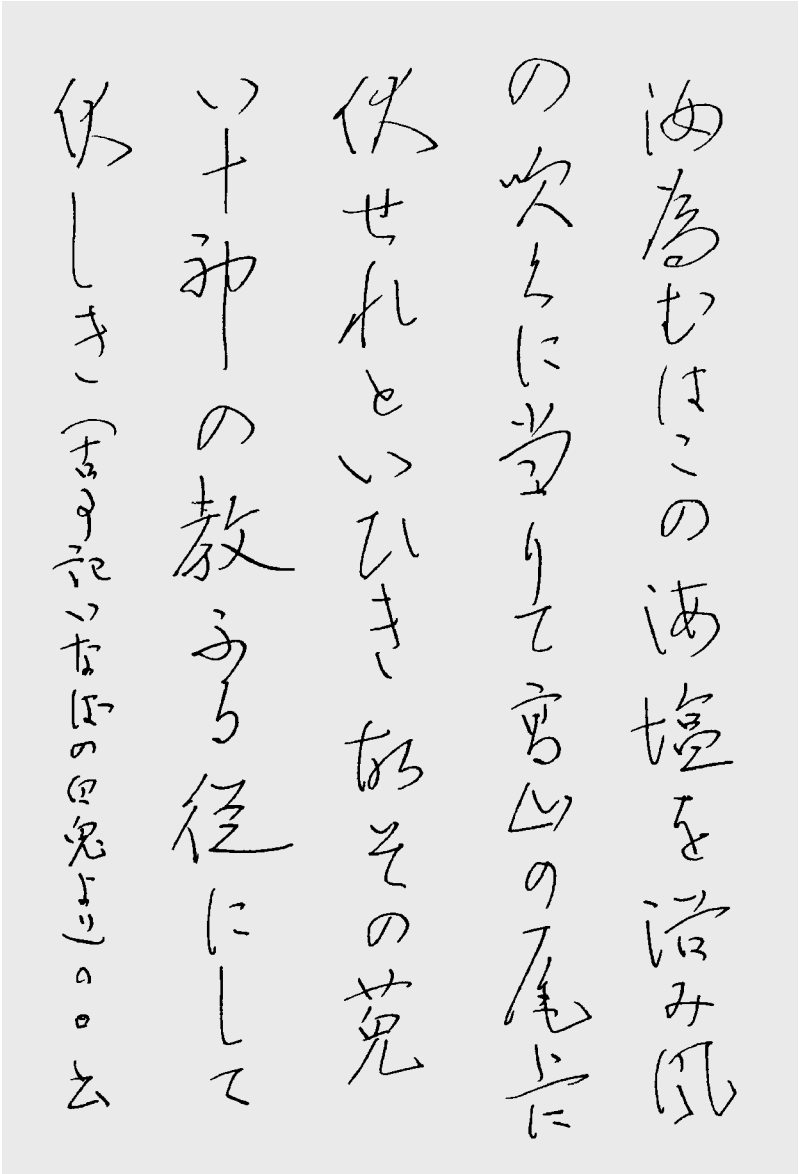
半田藤扇

〝筆や紙、即ち風流なる文筆が清閑に伴うのである〟の意。

我々は、筆・紙とは、一生ともに歩んでいく大切な道具です。いつもそれを踏まえて学書しましょう。抑揚をつけ、一貫性のある行書体作品を書いてみました。筆の種類も数多くあります。いろいろと試行錯誤して取り組んでください。

ペン字規定【六月十五日締めきり】

西林乗宣選書



用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (二)

西林乗宣

「古事記」

稗田阿礼が誦習した帝記、本辞を太安万侶が撰述したもの。その中に出てくるのがこの「いなばの白兎」。童話として余りにも有名だが、典拠がここにあるということは意外と知られていない。

大学に入学した1年次、国文学講読の定期テストで出題されたテーマが、「古事記における説話文学的価値について論ぜよ」。配られた答案用紙は真っ白。高校を卒業したばかりの学生にとっては、度肝を抜かれた今は昔の思い出である。

練習にあたって

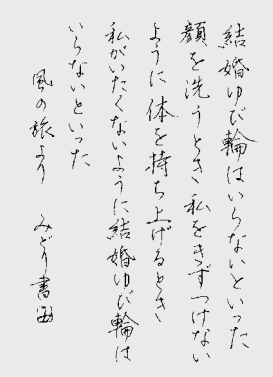
正しいペンの持ち方は、人差し指が外に向かってゆるやかな曲線を描きます。逆に内側に反る人が大勢おりますが、なかなか直りません。ペンについては次回に。汝（いまし）為（せ）む海塩（うしお）故（かれ）八十神（やそかみ）従（まま）に

※落款を入れ忘れないようにしてください。（落款は**自分の名前**を入れてください。）

今月のホープ作品 各部総評

NO.575

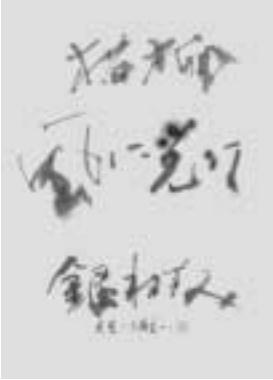
ペン字部　師範　都丸みどり
豊かな字形と線質の強弱による繊細なタッチで叙情を見事に表現した作品。
◎ペン字部総評　構成は比較的よくできているが、漢字かなのメリハリ、線質の強弱にもうひと工夫を!!　（孝予評）



かな条幅部　師範　杉浦　菊枝
思いを込めた線が、一行の表現を見事に支えて揺ぎなく、書きすぎない作品の余韻が美しい。
◎かな条幅部総評　繰返し表現の過剰は目障りです。字粒も大きすぎると全体が雑然とするので、余白を大切に制作のこと。（明子評）

前衛書部　特選　工藤　和香
紙面全体を使い、潤渇の線を生かし躍動感溢れるすばらしい作。飛沫も構にマッチして最高。
◎前衛書部総評　今回は余白を生かし、構成の明るい作が多かった。落款の印の大きさ一考。（洞仙評）

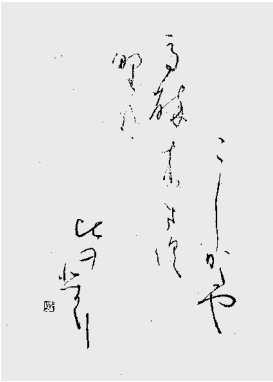
現代詩文書部　特選　西川　藤象
細線と太細をほどよく駆使した楽しく斬新な作品。古墨調のにじみと冴えた線質が見事。
◎現代詩文書部総評　表現の多様化に感服。しかし筆の動きを優先し、走りすぎの感あり。（舟雲評）



漢字条幅部　師範　横井　正江
自然なリズムで一貫し、渇筆の明るさを生かして、ほぼ自分の書のスタイルをつかんで安定する。
◎漢字条幅部総評　線には、突く引く、捻る、潤、渇、大、小、速度の違いなど色々の表情がある。線性の研究は最も大切。（春洋評）

漢字部　師範　熊谷　青山
濃墨のねばりを柔毫筆で潤いある表現に生かす。やや押さえ気味の行草表現でしっとり安定する。
◎漢字部総評　上級五文字表現は平凡作多し、書体書風の工夫をもっと取り入れてほしい。基礎力を養成する半紙の活用を。　（大雲評）

かな部　師範　坂本　みよ
やや線の重さが気になるが、俳句表現としては大胆な潔さが魅力です。字間の間が鮮やかで見事。
◎かな部総評　かなは特に転折が大切です。運筆が速すぎると転折があいまいになり、線に張りが生まれません。悲に注意。（洋子評）



今月の特別研究部優秀作品（特選）

現代詩文書

（大雲）

長島僊雨

「槇弥生子の歌」

長島僊雨書

67×145㎝

◆太細二本組を巧みに駆使し、広がりある作。潤渇のバランスもよくリズム感あり。落款部分小さすぎて貧弱に感ずる。本文を支える表現を。（大雲評）

◆これでも文字を書くという拘束に精いっぱい耐えた表現なのかも知れないと思わせられる。控えめなものへも向って是非、新しい世界を！（明子評）

◆横への広がりがありリズム感がある。全体に重く見えるのは渇筆の少ないせいか。最後の歌人名雅号は不用意すぎたかもしれない。（蒼玄評）

◆偏平な字形で、ゆっくりとしたリズムで行間に心を配りながら書き進めて落ちついて豊かな雰囲気を醸し出している。（春洋評）

漢字

（声香）

米倉聲香

「和而不同」

◆高度な技術は、筆が手の先に延びる身体の一部と見紛うものだという過去の体験が思い出されました。自由自在な表現が羨ましい。（明子評）

◆重厚な鋼のような線が紙面を圧倒する。少々墨が濃すぎたせいか広がりを欠いたが渇筆がそれを補って小さくは見えない。雅号もう少し太く。（蒼玄評）

◆筆の直、側による線の変化のおもしろさが魅力、線の切れ味が、紙面全体を明るく、さわやかにしている。特に「不」あざやか。（春洋評）

◆柔毫長鋒筆の弾力を生かし、大胆な潤渇の変化で紙面に動きを与えて妙。渇筆の細やかな肌合いに味わいがあり粗さを補っている。（大雲評）

米倉聲香書

180×90㎝

総評

「私たちは本来異なった個性を持って生まれてきたわけだが、それは決して生まれつき備えた才能ではない。年を重ねて励んだ結果、あるいは感性を養った結果により、培われるものと信じる。私たちはたえず自分自身を磨く努力を忘れてはならない。」（三宅素峰）

4月中旬に岡山市にて開催された「三宅素峰の世界」展を拝見しました。素峰先生のご遺作から豊かな感性と高い芸術的境地に触れ、感銘を受けました。今月は82点（漢15、か12、現28、前25、篆2）が出品されました。毎日サイズの力作が増加し、迫力と活気に満ちた作品が目立ちました。（萬城）

〈特選候補者〉

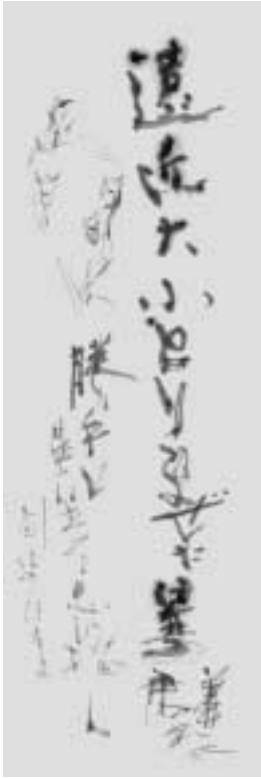
漢	一弦	木村 貴衣	現	卯月	前田まさ美
〃	華祥	安藤 華祥	〃	白珠	工藤 永翠
〃	千葉	大内 熒軒	〃	游水	荒川 空華
か	炎佳	佐藤 華炎	前	山王	鈴木 春江
〃	書泉	田子 白嶺	〃	蓮紅	一條 紅蕭
〃	〃	勝山 初美	〃	青蓮	大町 菜圓
篆	大雲	佐藤 希雲	〃	香書	泉水 政江

現代詩文書

（氷壑）

伊澤香雨

「大岡信詩」



伊澤香雨書

180×90㎝

◆二本の筆を使い巧みに線を表現している。後半部少しうるささを感じさせるのは潤いのある箇所がないせいか。淡墨の色は可、にじみ一考。（蒼玄評）

◆積極的な人は類型的な作品を嫌う。絶えず、壊してはつくる。その姿勢に賛同する。テーマ転換、大胆な運筆更に磨きをかけて。（春洋評）

◆鋭い筆致と大胆な潤渇の変化で明るくシャープな気風を見せる。二本組筆か、破筆が独特な表情を醸し出して妙。やや読みにくいのが難点か。（大雲評）

◆筆の能力の全てを見せられるような楽しさがあり、魅せられます。淡墨使用がうるささから救っていて、構成を十分に生かしています。（明子評）

前衛書

（四谷）

角田悠香

「墨のドラマ」

角田悠香書

134×48㎝

◆余白の白が鮮明に映える作。上部の激しい動きからヒラリと空間を舞う運筆が鮮やかです。下部の収めがややふらついたか。更なる飛躍を。（大雲評）

◆始筆は恐らく、ぶっつけるように強く、一気呵成の瞬間の仕事と想像します。余白にある小さな飛沫が、繊細さを感じさせて爽やかです。（明子評）

◆頭上から振りおろされた鉈のような運筆が空間を切り裂いて心地良い白を響かせる飛沫も一層白さを引き出して秀作。（蒼玄評）

◆上部の強く鋭い線が、縦長の白を支配している。下部のおだやかな納めは考え過ぎて、気力の連続が途切れた為だろう。作品とは。（春洋評）

かな

（前橋）

曽我昌子

「沈丁花春の月夜となりにけり」

曽我昌子書

136×70㎝

◆個性的な呼吸のかなに興味を持つ。息の長さの中で漢字の用筆が処々に顔を出して変った字形となっている。大胆な実験作に声援を送る。（春洋評）

◆写真では判らないが、微かな地模様の料紙にのびやかに表現する。紋箋独特のにじみがほのかな柔らかさを醸し出している。（大雲評）

◆粘りの強い線で紙面を狭しと動き回り、思いのこもった作品に仕上げた心の強さが伝わり、訴える力、引きつける力に頭が下がります。（明子評）

◆三行の構成で中心部に中心を置き重量感と動きを併せ持った作。二行目の最後の字の位置が気になるがこれも又かなの定石の表現か？（蒼玄評）

漢字研究部
（風信帖）

選評　小伏小扇

今月のホープ作品

阿部美豊

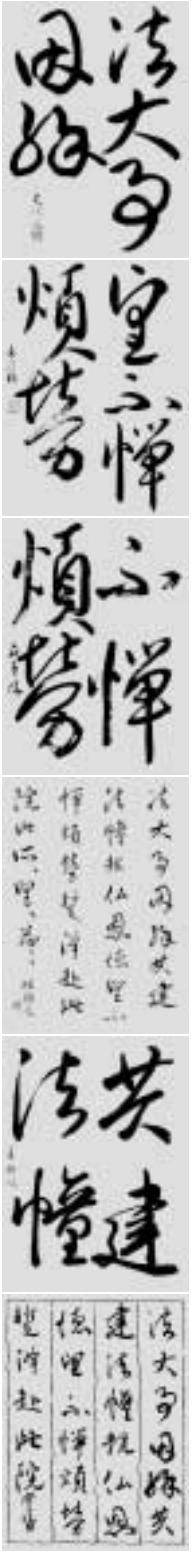
漢字研究部　特選　阿部　美豊

文字の姿体伸びやかで、ゆったりとした上部と小さくまとめた下部の調和が快いのと、筆先が立った用筆の強い線が響く作品です。風信帖第一通の特徴をよく理解して、何度も練習された成果だと思います。

◎漢字研究部総評

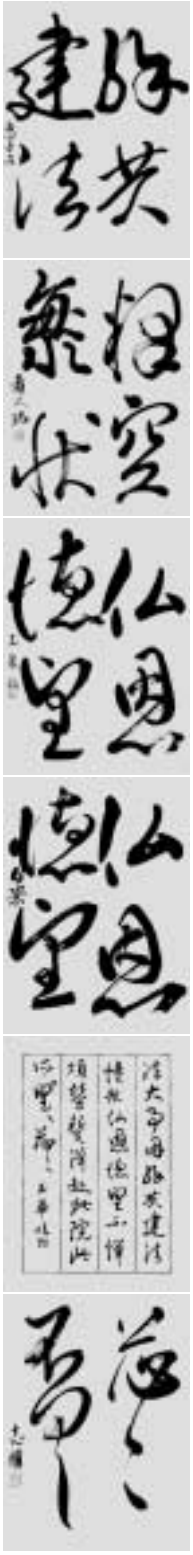
風信帖は空海の意気ごみが感じられますが、そこまで感じとることは無理にしても、筆意がどれだけ汲み取れるかは大切なことだと思います。四字書きの作品と小字作品がありますが、概して小字作品の方が筆意を上手に汲み取っておられます。四字書きでは一字一字を丁寧に書いている作品が多いのですが筆意が通っていません。古法帖を半紙に表現するときのむずかしさですが、書き込むことの大切さをよく認識してほしいと感じました。

紫泉　初江　桂香　裕侑子　恵星扇　恵泉



晃代　南汀子　正子扇　理燈　春子　澄

恵美　ま美子　久美　祥道　綾子　和美乃

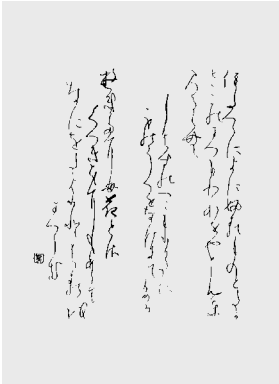


恵子　壽久　玉泉　白景　玉華　志朋

かな研究部
（石山切）

選評　黒　川　江偉子

今月のホープ作品



伊　藤　英　子

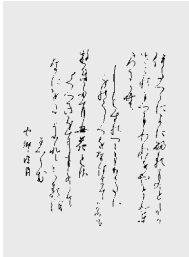
かな研究部　特選　伊藤　英子

流れるようなリズム感をよく捉え、伸びやかに、練度に裏付けされた筆使いが、よどみない明るい行間を造り爽やかな秀作としました。

◎かな研究部総評

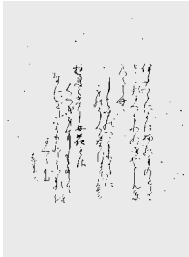
全体に真面目に書かれた作が多く、心強く拝見しました。今回の貫之集（定信筆）等、書き急がず、丁寧に運筆してください。雑な作品にならぬように。

良　愛
子　よ　石

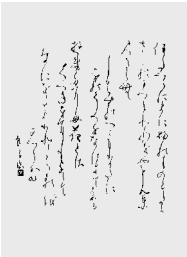


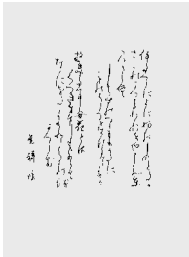
星　美　雲
祥　枝　卿
佐

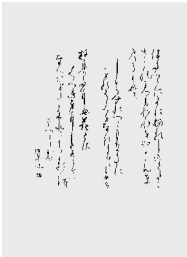
皓　佑　彩
泉　子　峰

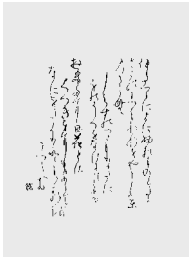


初　嵐　春
江　泉　華









かな研究部成績表

特選

正華　澄月　卯月　秀水　遊京　石橋　こ習　正華　千葉　春汀　A I　N H　石習　加坂　伊泉　辰村　光寿　良み　笑愛　良泉　弘博　龍紅　美清　龍路　塩磯　森碓　前後　竜玉　玉葉　己未　五丸　己志　や希　竜仙　紅瑤　清雪　長月　正華　英峰　大阪　樹原　楽硯　東光　竜華　広泉　豊祥　春島　春田　A I　汀　生方　沖由　小野　小野　寺　佐和　美玉　紅尚　昭豊　淑谷　尚子　二子　美涼　紫蘭　玉華　子子

秀作（60音順）

澄春　高N書H泉　大こだ雲　高崎　もく　蘭鼎　湘南　竜泉　大雲　玉松　竜前泉橋　竜葉　千汀　春I　A華　N H　石習　こだ　正華　千葉　石習　京橋　遊雲　秀水　卯月　澄春　正華　宇井　岩上　伊藤　伊藤　五十嵐　朝倉　青木　江理　伊川藤千　小崎　泉嶋　磯水　塩貝　森澤　碓田　後井　村藤　辰田　伊本　加瀬　坂本　松丸　大石　星野美　神谷　内田　吉田　西澤　高橋　新谷　宇田　伊藤川　楠麗　郁子　良佑　則栄　佳子　爽陽　理子　恵子　優子　路子　龍宝　清耀　美紅　龍博　良弘　笑泉　光華　寿子　良子　みよ　愛石　星祥　佐枝　雲卿　皓泉　佑子　彩峰　初江　嵐泉　春華　英子

佳作（60音順）

澄春　霜月　己未　大雲　硯水　幕張　千葉　京橋　A I　椿翠　前橋　玉松　己未　五葉　玉葉　己丸　や志　ま希　竜泉　仙台　紅瑤　清雪　長月　正華　英峰　大阪　樹原　楽硯　東光　竜華　広泉　豊祥　春島　春田　A I　飯嶌　湯本　山根　森下　宮澤　松島　松重　堀川　藤村　平井　春山　橋本　中山　都丸　遠山　館野　田玉　高橋　高木　千歳　杉百　神浦　佐保　後藤　近藤　小山　小暮　呉野　熊谷　小野　沖寺　生方　由佐　美和　紫玉　紅尚　昭豊　淑谷　尚子　二子　美涼　紫蘭　玉華　子子　紫苑　桂月　美子　祥子　草泉　翠秋　翠舟　魯景　昌春　栄子　勝子　紅美　尚霞　ど子　希子　津子　哲子　敏泉　花子　倫子　菊枝　佳子　桂香　喜子　多子　淑子　尚子　昭二　豊美　谷涼　紫蘭　玉華　和子　美子

入選（60音順）

八街　竜泉　百谷　高陵　秀峰　春汀　蓮紅　華祥　秀葉　五橋　春月　澄春　〃　大阪　洞書　千字　千葉　も く　森地　秀水　湘南　己未　有春　紅岳　声瑤　治香　硯田　八水　正生　八華　街　硯水　三鷹　京橋　椿翠　調布　正華　四谷　幕張　広島　〃　大雲　大阪　華祥　英峰　広島　泉会　秀明　竜泉　石習　大阪　熱田　浅川　相澤　會木　渡辺　吉原三　遊佐　山崎　柳堀　森田　宮川　宮内　三嶋　松佐　藤井　濱田　永久　戸山　戸守　東村　寺部　澤平　田中　多田　武山　高野　砂川　須田　鈴木　嶌本　柴田　篠名　椎恵　佐々　佐木　後藤　近藤　小林　木村　木原　北村　北西　川村　川合　河藤　加林　片原　香田　小高　岩崎　今村　犬飼　飯田　紅　彩　みな　江　玉翠　勇介　信渓　枝子　紅雅　桜江　政翠　睦子　春蓮　幸平　幸子　敏子　白鈴　智子　竹雪　博薫　悦舟　絹子　悟子　吉惠　桂彩　芳枝　杏華　琉華　香舟　香楓　麻子　翠泉　美子　幸子　町華　輝芳　雅子　祥子　松春　晃代　淳子　秀子　惠子　南舟　瑶汀　和雲　智敬　雅子　美芳　冨代　西子　洋鈴　貴子　道泉　恵石　萩

正華　八街　誠和　樹原　顧緑　咲舟　明漢　八雲　弘舟　昌か　竜苑　幸泉　東扇　大小　高雲　澄崎　竜春　翠泉　調吟　詢扇　う る　生大　英峰　高崎　生大　彩　竜泉　艸玄　大阪　誉　松波　詢田　詢扇　大阪　青峰　福山　秀明　も く　千葉　高真　こだ　千葉　土気　恵雅　正華　岩沼　洞書　椿翠　華祥　大拙　も く　生泉　京橋

萱谷　菅野　新谷　庄司　志村　志水　清水由　嶋條　七与　鹿内　猿渡　佐藤　櫻田　佐久　佐久　佐間　鷺間　酒井　齋藤　後藤　後美　近林　小藤　工本　楠本　君え　吉島　北瀬　北村　岸又　木田　亀内　貝井　小賀　小野　小野寺　押山　尾川　岡本　大森　大野　大槻　梅山　梅原　内田　臼井　板橋　石橋　石崎　安藤　安美　安藤　荒木　新井　新部　阿

悦子　八重　翠光　咏艸　抱舟　起子　正子　祢子　裕美　洋煌　初右　龍香　美貞　節緒　佐子　恵子　翠子　知香　閑子　雅窓　香子　春蘭　い翠　彩雨　欣子　春峡　東子　志龍　紫風　窓萩　理絵　京芳　江詢　純子　浥晨　真峰　喜代　藤栄　幸江　久子　虹祥　慈扇　綾乃　雅邦　知子　楊子　代風　華子　孫祥　藤功　廣雪　春子　清

選外　昌苑　北陸　帝塚　〃　八生　竹扇　玉川　如月　も く　紅苑　生大　艸玄　五葉　皓映　正華　高陵　稲毛　湘南　玄宵　春汀　有秋　秀水　大雲　千葉　大阪　青見　菁　八街　東向　詢扇　も く　北陸　泉会　正華　艸玄　〃　大阪　泉会　正華　翠柳　湘南　英峰　幕張　竜泉　秀峰　藤春　澄楽　喜泉　竜瑤　亀峰　英翠　椿翠

173名氏名略　吉田　吉田十　横井　湯浅　湯浅カ　山裕タ　谷村　八田　森木　茂田　木田　村庭　村田　真岡タ　松田　松花　前村　細郡　古須　二上　藤井　福田　福島　福川　平山　比田　樋口　林加　羽成　畠山　野村　西川　西岡　永田　長尾　永井　中澤　冨田　徳田　辻念　知池　近丸　田中　田橋　高橋　高橋　高橋　芹野　鈴木　鈴木　鈴木　鈴木　助川

翠綾　四子　正江　恵子　ツ子　炎子　美秀　順子　藤子　真谷　珠蘭　ケ満　ミ風　映華　律子　麗子　貴子　美子　紫泉　晴子　キ子　和子　和香　彩華　代子　和子　雙鶴　紅楓　芝香　陽詢　藤象　悦子　時子　翠峰　宏枝　雅子　萩彩　祥峯　律子　柳子　貞芳　蒼子　賢雲　雅泉　幸苑　昌蘭　澄翠　史子　利子　智広　多美　栄子